

人生ハンド仏句

第20号

H. 15. 11. 1
(毎月1日発行)

編集・発行
玉蓮山 寺部
真成集
編集部

人々は、どんな思いでこ
聖骨をお迎えされたので
しょうか、拝するに余り
あります。

大聖人と出会う儀式

「お会式」(三)

住職 谷川寛俊

十月八日には本弟子六人を定めて後事を託し、「御形見」分けをなされ、次第にご本仏お釈迦様のもとへお還りになる準備が整って参りました。この時「御形見」として配分された全財産は御遺文によると、錢二十五貫文、小袖十六という誠に驚くべき清貧で有られたと言えましょう。

十一日には弱冠十四歳の経一磨(後の日像上人)を枕辺に呼び自らが果たせなかつた帝都(京都)弘通をご遺命されました。こうして今生総ての使命を終えられた大聖人は、十二日酉の刻(午後六時)自ら床を北へ向けて横たわり机に香華を供え、大曼陀羅御本尊を掲げさせ立像釈尊を奉安させ、目を

閉じると静かに御経を誦し始められました。四方からの来集のお弟子やご信者も、流れ落ちる涙をこらえつつ大聖人の御経読誦と和し、翌弘安五年十月十三日辰の刻(午前八時)、突如として大地は六種に振動し、長老日昭上人がうやうやしく「臨滅度時の鐘」を打ち鳴らし、大聖人の御入滅を告げられました。聖寿六十一歳でありました。この時、前庭の桜花、時ならずを開いて供華の誠を捧げ法性の春を表したと伝えられ、全国のお寺でお会式に桜花を供える由来は、ここに始まったのであります。ご葬儀は型の如く、翌十四日戌の刻(午後八時)に御納棺、十五日深夜十二時、子の刻に茶毘、十六日にご収骨、十九日初七日忌と厳修し、二十一日にご聖骨を捧じて身延へ出発、二十五日にご聖骨は身延山へお着きになりました。わずか四十余日前にお見送りしたばかりの身延の波木井公はじめ、お留守を預かっていた

かくして大聖人様が涅槃の雲に入り給いてより今年七二二年を数えます。大聖人のご生涯は実に「立正安国論」に始まり「立正安国論」に終わっておられます。

立正安国論は教主釈尊の出世の本懐であり、末法を救う唯一最高の教典である法華経より生み出された、予言と福音の書であり、不安と絶望から人々を救済する救世主の書であります。今、世界そして日本は大きく揺れ動いております。相次ぐ天災、政治の混乱、経済不況、国際紛争、これらは皆、立正安国論の教えによらなければ真の解決救済はもたらされないものであります。

大聖人ご在世の時と、現代は一同であります。

耳を澄まし、心を静めてお題目をお唱え下さい。

大聖人が私達の為に無限の大慈悲をこめてお唱え下さっているお題目の梵音が響いて参ります。

お会式とは、あなたと大聖人様が「出会う儀式」であります。

うばい合えば

足らぬ

わけ合えば

あまる

うばい合えば

憎しみ

わけ合えば

安らぎ